

京都の都、五条大橋で弁慶は懐かしそうに歩みを止める。

「思えば」

こみあげる思いに、声が裏返りそうになるのを咳払いでごまかした。

「私の人生はここから始まったと言えよう」

そう言うのと隣の小さな主を見た。

義経は何か考え事をしているのか、弁慶の言葉にも上の空だった。

「あの頃のワシは、己の腕を埋もれさせるのが口惜しくて仕方なかった。刀を千本？ そんなものはどうでもよい。ワシは待っていたのだ。我が腕を惜しみなく使える場所を。この身を預けて後悔せぬ主を」

弁慶は欄干をポン、ポンと叩く。

夜な夜なここで待に挑み、打ち負かしては刀を奪い取った。そんな自分が一人の少年に負けた。

少年は笛を吹きながら、ふらりとやってきた。最後まで刀を抜かず、頭の上を自在に跳びまわり、最後は笛であっさりと弁慶を打ちぬいてしまった。

「主どの、もう、あの時のように、欄干の上を飛び跳ねる事はできまい」話を向けられ、初めて義経は弁慶に顔を向ける。今聞いた言葉を頭の中で繰り返し、ようやくその意味をさとった。

「ああ、い、いや」

頷いてから慌てて首を振って否定する。

「何を言うか弁慶」

義経は自身を奮い立たせるように声を大きくした。だが、どこか言葉が棒読みになっている。

「我が健脚は、壇ノ浦では敵の平家も知るところであろう。微塵も衰える事などないわ」

すると弁慶は目を輝かせてニヤリと笑った。途端に初めて出会った時の、獲物を狙う顔に戻る。

「ほう、では、今ひとたび、お手合わせ頂こう」

そう言うと、弁慶は持っていた薙刀の鞘を抜いた。

「え？」

「手加減いたしませぬぞ、主どの」

最後まで言い終わらぬうちに、弁慶は薙刀を振りかぶり、義経に向かって振り下ろす。

義経はひらりとかわし、後ろに跳ぶ。足は難なく高欄の縁に着地する

はずだった。だが着地した足は、ツルリと滑る。

「あるじー！」

欄干から身を乗り出して、驚愕の顔を向ける弁慶の頭の向こうで、稲光が天を二つに裂いている。

―ビリビリビリ―

雷が大きく鳴り響く。

―きやー、何すんのお―

雷鳴の向こうで声が空に響いている。

『いったい誰の声だ?』

義経の疑問は冷たい鴨川の水にかき消された。

破いた本を手に、大男は怒りに髪を逆立てる。だが、カレンはひるまず、眼鏡をはずし、机に手を置くと勢いよく立ちあがる。

「人間の運命を本に綴り、この―

と、一旦言葉を止め、周囲をぐるりと見渡す。そこは高い塔の中。その壁一面が書棚になっており、大きさ、厚さ、様々の本が納められている。塔の中央には螺旋階段が果てしなく続き、その途中にカレンたちがいる円形のフロアが広がっている。

「この、図書館を管理する、運命の女神に対するその態度はいったいどういうおつもりですか―」

男はその問いに答えず、二つに破いた本を、さらにまた破く。

「いやあ、やめて―」

カレンは慌てて男の手を掴もうとするが、その前に、男は破いた本を捨ててしまった。

「やはり、おぬしにヤツの人生は任せられん―」

鼻を膨らませて言う男はエルゴック。イカヅチの神で、髪はいつも静電気で逆立っている。人呼んで、いや、神呼んで『逆髪のエルゴック』あるいはその見た目そのままを表して『逆髪の熊』と呼ばれている。

「熊さん・いえ、エルゴックさん。彼の運命を一度でも私に託したのですから、口出ししないでいただけませんか?」

「だからここまでは黙っていたではないか。ヤツを義経にしたまではないが、鴨川にドボンはないだろう―」

カレンはメガネチェーンを指に絡ませ「ふんツ」と鼻を鳴らす。

「いいですか? 私は運命の女神です。彼に運命の選択肢を与える事は出来ても、それを選ぶか否か、また、その運命の中で花を咲かせるか否か、それはすべて彼自身にかかっているんです―」

熊の、いや、エルゴックの眉間の縦じわが一本、二本と増えていく。

「なら、この設定を持ってくる方がおかしいだろう。橋の上をびよんびよん跳ねる? できるか!」

「だって、それはあなたが、命の恩人である彼を、モテモテの運命にしてほしい、とおっしゃるから―」

そこでエルゴックは感慨深そうに腕を組み、塔の天井を見上げる。ガラス張りのドーム型になった天窓からは、七色の光が射し込んでいた。

「そう、あれは、オレが武者修行に、地上に降りた時の事」

山の天気は変わりやすい。峰を縦走していたさなか、遙か先に黒い筋が見えたと思った刹那、みるみるそれは頭上へ到達し、猛吹雪となった。エルゴックは急いで下山にかかる。ふもとへ向けて手を伸ばすと「雷（いかづち）あれ」と呟く。すると伸ばした手の先に弓が握られている。もう一方の手で弦を引くと、そこに矢が現れた。限界まで弦を引き、矢を放った。矢は真つすぐに山を滑り落ち、通った後には道が出来ている。エルゴックは道を一気に駆け下りる。吹雪は氷の塊を凶器にしてエルゴックの身体に襲いかかる。雷（いかづち）の気を身にまえば何という事も無いが、あえてそれを全身で受ける。

「どこが武者修行ですか。ただ吹雪の神と戯れていただけじゃありませんか」

エルゴックは吹雪の神と仲がいい。

「何しろ、地上でも、吹雪型駆逐艦『雷（いかづち）』とあるくらいですものね」

「帝国海軍がオレ達の何を知っているというんだ。第一、オレは、大破したからって脱がんからな」

そう言い捨てると再び記憶をたどる。

道を滑り落ちていくと、不意に前方を横切るものがあつた。兎だった。

兎はエルゴックに気付くと身体を硬直させ、その場で動かなくなった。

エルゴックは地上の生物には一切手を出さない事になっている。何の落ち度もないウサちゃんなら、なおさらのこと。

身体を翻すと道を飛び出て雑木林を転がり、ひと際大きなブナに激突した。後の記憶はなく、ただ滑り落ちていく感覚だけはあつた。

目を覚ました時、あたりはすっかり暮れていた。遠くに車の排気音が聞こえる。どうやら街まで来てしまったようだ。

「腹が減った」

地上にいる間、神であっても人間と同じように身体は色々な物を要求する。寒い、暑い、眠い、と言う風に。だからこそ、エルゴックはここを修行の場と称している。

不意に甘く香ばしい匂いが鼻を刺激する。身を躍らせるように起き上った時、目の前に細い足があつた。その足をたどると怯えた顔がこちらを凝視している。

「だ、大丈夫、ですか？」

目があつてしまった以上、仕方なく、といった風に、その足の持ち主は聞く。

「ご親切、いたみいる」

エルゴックはそう言うのと、いきなり細い足の持ち主が手に提げていた袋をひったくり、中にあつた弁当をその場で食べ始めた。

取られた方は、茫然とそれを見つめる。

「何度聞いても、追い剥ぎのようにはか思えませんね」

「なに、そのおかげで、オレは今もこうして生きている。その恩を返さなくてはならないのだ。ヤツの望みをかなえなくてはならない」

「それが、彼女が欲しい、と言う事ですか。無欲な方ですね」

「ああ、とにかくヤツはいい奴なんだ」

エルゴックは二度目に会った時を思い出す。

「すまないが」

駅前でティッシュ配りをしている男性に声をかけた。

「このあたりで、足の細い、シヨウガ焼き弁当が好きな若者を知らないだろうか」

およそふざけているとしか思えない人物像を聞いてくる大男に、ティッシュ配りは固まる。

「シヨウガ焼き？」

エルゴックは必死にシヨウガ焼き弁当以外の事を思い出そうと努力していた。だが、思いだそうとすればするほど、あの甘辛い、醤油の焦げた芳しい香りが鮮明に蘇ってくるだけで、男の顔も名も思いだせない。ティッシュ配りは恐る恐る言う。

「それって、俺の事ですか？」

エルゴックが視線を下に向けると、男の細い足があつた。

「何しろ、暗くて特徴が分かりづらかった。いやあ、あっちの方がオレを覚えていて助かった」

エルゴックはカレンの冷たい視線を避けるように背を向け、笑つてごまかす。

「忘れようもありませんよ」

弁当泥棒にカレンはそっけなく言う。

「この前も、呼び出しておいて、気付かずに何度も前を通り過ぎたそうじゃないですか、可哀相に、いい加減、顔を覚えてあげたらどうです。名前だって、ヤツとか、癒し系とか呼んで、結局覚えていないんでしょ？」

「そこなんだ」

拳をてのひらにうちつけて、エルゴックはカレンを振り返る。

「あの癒し系は要するに、存在感がない。それはヤツの置かれた運命が、ヤツ自身を輝かせきっていないからだ。だからここへきた」

「はい、ですから、こうして歴史上のモテ男という舞台を用意して、あげました」

語尾を強めてカレンは言った。これ以上どうしろというのか、と目が訴える。

「ダメだ、全くダメだ、考えが安直すぎるんだ。こんなのではなく、もっと、こう・・・」

ついにカレンの堪忍袋の緒が切れた。
「さつきから何なんです。あなたにはわからないでしょうね。私の運命の女神という役職が」

カレンは自分の席に着くと、水を飲んだ。

「私はねえ、誰が女神をやつてもおんなじや、おんなじや、思うてねえ、そんなら私が、この国を、人々の暮らしを良くしようと、一生懸命」
言葉に合わせて机をバンバンと叩く。

「頑張つて来たんですー！」

「たまらずカレンは「うえーん、えーんえんえん」と泣きだす。

「そのネタはやめておけ、一年後、これを読む者は、おそらくチンプンカンプンだ」

「少子化問題を」とさらに演説を続けていたカレンは得意げに言った。

「大丈夫です。NNMRとググれば出てきます」

「言い方が悪かったかもしれない」

エルゴックは完全に無視する。

「とにかくもう一度、別の運命を与えてみてくれないか。言っておくが、ヤツは運動神経がすこぶるいいとは言えない。その点を考慮してほしい」
「はいはい、わかりました」

カレンはガラス瓶からペンを抜くと、手を机にかざす。するとそこに新しい本が現れた。眼鏡をかけ、真つ白なページにペンを走らせる。

「で、どんな運命がヤツを待っているんだ」

待ち切れずにエルゴックは本を覗き込む。

「おお、ここは」

息をのむエルゴックに、カレンは得意げな顔でペンを進める。

「よし、俺も行くか」

というなり、エルゴックは本の中へ顔を突っ込んでしまう。

「ちよつと、ダメですよ。あなたがここに行ってしまったら、歴史が大きく変わってしまうじゃないか」

言い終わる頃には既にエルゴックの姿は消えていた。

「もう、仕方ないなあ」

カレンはペンを持ちかえると、それに髪をくるくると巻きつけて頭の上にとどめる。そして広がるスカートを手を持ち、「よっこらせ」と机の上に乗ると、自らも本の中に姿を消した。

後に残る本には書きかけの文字だけが残った。

―昔、男ありけり―

動きに合わせて、衣がせわしく音を立てる。暗がりの中、黒松、橘、藤

棚らしき影が通り過ぎる。屋敷まであともう少し。

これは運命だと思った。情を交わした女は数知れないが、手が届きそうで届かない。寝ても覚めても、その面影を求めてしまうというのは、これが初めてだった。

今日しかない。じきに輿入れが決まっている。今日を置いてあの人をさらう好機はない。

「待たれよ」

鋭い声が足を止める。屋敷の警護に当たる舎人（とねり）が、松明を手近づいてくる。

「こんな夜にどうされました」

「あの、ええと」

心のままにここへ来てしまった。人に咎められたらどうするか、などとは考えも及ばなかった。

「こちらに、火急の用があつて参った。すぐに御取り次ぎ願いたい」

堂々とした声が後ろから聞こえる。振り向くと、直衣をパンパンに張りつめて着ているエルゴックが立っていた。

「加勢に来たぞ、癒し系」

そう耳打ちすると、再び強面の顔を舎人に向ける。

『癒し系？ 誰だそれは、私は在原業平（ありわらのなりひら）だ』

そう心で思うが、一瞬、疑問が走る。

「家人は今、宿直（どのい）に出られております。あなたはどなたですか」

エルゴックの風体にも、舎人は臆することなく冷静に聞く。

「オレか、オレは逆髪のエルゴックだ」

すると舎人はにわかに関色を変えて後ろに下がる。

「さかがみ？ おお、では坂上（さかのうえの）田村麻呂の末裔、坂上（さかがみ）家の方ですが、これはこれは失礼いたしました坂の上のク・・、いえ、坂の上の方」

舎人が膝を地につけて頭を下げる。すかさずエルゴックは「行け！」と目くばせした。

カレンは十二単を引きずりながらエルゴック達を探す。

「まったく、この時代の着物だったら、何キロあるのよ。どんだけ皆アスリートなのよ」

渡殿（わたどの）を踏むと、「ギイ、ギイ」と床の軋む音が不気味にあたり響きわたる。

「なんだか、こう、暗いと、出そうよね」

人の気配が全くないことに、かえって心細くなった。

どこからか香が漂ってきた。人恋しさにカレンは妻戸をそつと開き、

中をのぞく。そこかしこに几帳が立てられ、細かく仕切られている。私たちの部屋のようだ。もつとよく見ようと人目をはばかりながら奥へまわると、足に違和感を感じた。

「ぎゃっ」と言う声に、カレンが足元を手でまさぐって確かめる。そこには、やんごとなさげな娘が倒れていた。

「しまった、踏んじやった」

カレンは娘を抱き起こすが、よほど強烈な秘孔を突いたのか、気絶してびくともしない。

「姫様」

遠くで女官の音がする。カレンはぎくりとする。

「姫様」

また声が呼ぶ。さっきより近くなった気がする。返事をしようか迷っている、

「姫様」

声はさらに近くから聞こえた。暗がりでも見えない中、声だけが近寄ってくる。カレンはぞくりとした。

「ひーめーさーまー」

自分のすぐ目と鼻の先で声があがる。見ると、几帳の上に髪の毛の長い女の顔がのっかっている。顔は暗闇の中で青白く光り、にやりと笑うとどす黒い歯がぞろりと現れる。

「きやー」

カレンは袖で顔を隠す。

「どないしましたん？」

女の生首が心配して声をかける。女官が几帳の向こうから顔を出しているだけだった。この時代の成人女性は眉を抜き、歯を黒く染める。化粧は時代によってこうも違うのかとカレンは美の変遷を思う。

「姫様に御取り次ぎして欲しい言うて、公達（きんだち）が来とりますねん」

どうやら生首は、今自分が踏みつぶしてしまった娘を呼んでいるらしい。

「あー、はい、います、います。ここにいます。なんですか」

手近に落ちていた、多分娘の物と思われる扇を拾うと、それを開いて顔を隠す。

女官は後ろを向くと、「はい、なんででしょう」と別の女官に伝える。伝えられた女官はさらに別の女官に「はい、なんですのん」と続く。

高貴なお姫様となると、直接声を聞かせてはならない。間に女房たちを侍らせて、言葉を伝えていくのがしきたりだった。

じれながら待っていると、ようやく姫の声が女官を通して戻って来た。『よかった、まだ起きています』

すぐ行動に移る前に、心づもりだけはしてもらいたい。焦る気持ちを抑え、要件を言おうと・・・

『何を言ったらいい』

これまで口説き文句ならいくらでも出てきたというのに、今は全く浮かばない。

『どうした、私はこんな男ではなかったはず』

「まったく、しょうがない奴だな」

のっそりと背後に大男が立つ。直衣の片袖が無くなっているエルゴックだった。

「手加減するのに手間取った」と言いながらエルゴックは身をかがめると女官に要件を伝える。

「初めて見たその日から、私の目は、あなたから離れる事はありませんでした。以来、私の心はいつもあなたのお傍におります」

言いながらエルゴックの顔が赤くなっていく。恥ずかしさに、隣の癒し系の頭を殴る。

伝え聞いた女官はできるだけ正確に、を努めながら言葉通りに言う。

「初めて見たその日から、私の眼はあなたから離れません。いつもあなたのお傍におります」

次の女官も誠実に伝え・・・ようとする。

「初めて見た時から、私はあなたのお傍におります」
長い文章は短く直される。

「私はあなたの傍にいます」

几帳の上の生首がくるりと振り返る。

「いーまーあなたの、そばに、いーるーのー」
暗闇で白粉が浮かび上がる。

カレンは何とか悲鳴をこらえた。

エルゴックはさらに続ける。

「今宵、いてもたってもおられず、来てしまいました。どうか、今から、私のする事を怖がらないで、そこでお待ちください」

「今宵、いてもたってもいられず、どうか、今から怖がらないでお待ちください」

「今から、いてもたってもおられず、お待ちください」

「今から、いてもうたるさかい、そこで待ちいや」

「くーびい、洗って、待てえや」

紅を引いた口が大きく開かれ、黒まだらの歯がカチカチと鳴る。

『絶対わざとやってる』

それにしても、訪問者はどのどいつなのか。これほど恨まれるこの姫は何をしたのか。

身の危険を感じたカレンは几帳から飛び出した。逃げ場を探し、御簾

を蹴破り外へ踊り出る。

するとまたしても足の裏に違和感。見ると在原業平こと、癒し系が御簾の下で土下座をしていた。

「おお、姫の方から出てきてくださるとは」

エルゴックが感嘆の声をあげる。そこでようやく、今までさんざん脅し文句を言ってきたのがコイツだとわかり、この男ならさもありなんと、カレンは合点がいった。

「よし、行くぞ」

エルゴックはそう言うときカレンを抱きかかえ、そのまま癒し系に押しつけた。

「うおっ」

カレンの体重に十二単の重量が加わり、腕の中の姫君は、まるで関取並みの重さだった。

『これを抱えていくのか』

エルゴックはスノコを飛び降り、走り出す。癒し系もそれに続こうとするが、数歩歩いただけでカエルのようにその場に潰れた。

「ちよつと、失礼ね。そんなに重く無いわよ」

カレンが睨む。この時になって初めて、今宵さらうはずだった姫とは違う人物が目の前にいることに気づく。

「あなたは」

誰か、と言おうとした時、ボロボロになった舎人が仲間を連れてやってきた。

「あれだ、曲者だ」

舎人の背後から、大男がのっそりと歩み出る。

「杏柳（あんりゅう）どの、お頼み申す」

舎人が言うとき、後ろで別の仲間がはやし立てる。

「杏兄さん、やっちまえ」

「いけいけ、杏ニイ」

「そうだアンニン」

わらわらと現れる野次馬たちに、流石にエルゴックも焦りがでる。

「まずい、行くぞ、おっとなんだその無様な姿は、仕方ない」

エルゴックは潰れた二人を拾い上げると肩に担いで走り出した。

山奥へ来たところで、ようやく三人は歩みをゆるめた。道々エルゴックがこれまでのいきさつを説明していた。

話を聞くうち、癒し系も自分の記憶を取り戻し始めていく。

久々に地上へ降りたカレンは、思うように身体が動かない。

「大丈夫ですか。少し休みましょうか」

癒し系が心配して声をかける。

以前自分に声をかけた時とは、全く心配の度数が違うのに、エルゴックは不機嫌になった。

「おおかた、腹が減っただけだろう。これだから箱入り女神は」

シヨウガ焼き弁当泥棒の言葉に、カレンはムツとしたが、その通りなので、言い返す言葉も見つからない。また、指摘されたことで、さらに空腹が増し、目に映るものが皆食べ物に見えてくる。椿の葉の上で夜露が光る。

「あれは、白玉団子、椿餅」とブツブツ言っている。

「エルゴックさん、やはり、休ましましょう」

幻を見始めたカレンに、癒し系は強く進言する。

折よく廃寺が見えた。お堂に入り、三人はやっと人心地ついた。

「すまなかったな」

珍しくエルゴックが神妙な顔つきで言った。

「本当なら、ここに居る姫は、こんなポンコツ女神ではなかったはずだ」

「ポ」
恥じらいの音ではなく、カレンが怒りのあまり、それ以上言葉にできなかった声だった。

「今度こそ、平安時代のプレイボーイ、在原業平になれば、願いを成就させられると思った」

「いえ、俺の人生なんて、所詮、こんなものです」
空に細い月が浮かんでいる。

「欲しいものに限って、手に入らない。人が当たり前のように持っている物でも、俺にとっては、喉から手が出る程欲しいのに、それがかなわない。あの月のように、俺に満月は来ないんじゃないかな」

「そんなこと言わないで」

カレンが現実に戻って来た。

「あなたはまだ、自分の運命を生かし切れていないだけよ。いい？ 人生を作るのは運命なんかじゃない。あなたなの」

空腹で足もおぼつかなかったというのに、胸をそらし、手を腰に、カレンはすつくと立って見下ろす。

「彼女が欲しかったら、引き籠もってちゃダメ。一步前にでるのよ。勇気を出して、あなたは、充分、好青年なんだから」

その時、無数の松明が近付いてくるのが見えた。

「くそ、これまでか。カレン」

エルゴックが振り向く。カレンは頷き、髪に差していたペンを抜く。

目の前でカレンの長い髪がはらはらと下へ流れる。重かった十二単を脱ぎ、首に下げた眼鏡をかけると、頼りないドジな女神の印象が一変した。

「運命を紡ぎし女神、カレンが命じる。古（いにしえ）のおだまき繰り返し、今ひとたび、手繰（たぐ）り寄せん。この者の定めを」

そうして天に向けて大きく腕を動かすと、少し時間を置いて、動きの通りに空に線が現れる。

引かれた線は文字を作り始めていく。いったい何を書こうとしているのか、癒し系はじつと見つめる。

松明の群れは怒号も交えて接近してくる。エルゴックは焦りながらも、カレンの文字が完成するのを待った。

カレンは額に汗しながら大きく腕を振る。やはり、机の上で本に書くのでは、使う力が違うのだろう。

「出来た」

そう言っ肩で息をするカレン。腕を下ろした後に、カレンの書いた文字が完全に浮かび上がった。それを癒し系が読み上げる。

「・・・リセット・・・？」

文字は現れるや、「セ」と「ッ」の間に吸い込まれて消えていった。消えた所に黒い穴が現れると、まるで巨大な鍋の蓋が開かれたかのように、あたりの空気を吸い込んでいく。

「さらばだ、癒し系。次の運命で待っているぞ」

エルゴックは自ら跳び上がると漆黒の中に消えた。

乱れる髪を抑えながら、カレンは振り向く。

「ごめんなさい」

身体は宙に浮き始めている。

「もう一度、やりなおし。次こそ、あなたにふさわしい運命を――」

「待って」

思わずカレンの腕を掴んだ。カレンの髪は巻きあがり、その先は暗闇に消えている。

「一つだけお願いがあります」

「お詫びに聞きましょう。何ですか」

癒し系は必死に勇気を振り絞った。

「どんな運命にしてもいい、ただ――」

真剣な眼差しがカレンの瞳に焼きつく。

「ただ、記憶だけは消さないで」

――あなたを忘れたくない――

さすがにその言葉は言えなかった。

カレンは答える代わりに少女のように笑った。少し恥じらいが混ざっているように。もしかしたら通じたのかもしれない。

「欠けない月が無いように、満ちない月もないのよ」

そう言うと、カレンはそっと癒し系の手を離す。ゆっくりと上昇し、闇の中に消えていった。

「貴様、姫をどこへやった」
いつの間にか、舍人達が刀を抜いて囲んでいた。

「鬼だな。正体を現せ」
行ってしまった。

空には細い月が浮かんでいるだけだった。

—満ちない月も無い—

カレンの言葉が心に響く。

ほんのひと時の出会いだった。そして跡かたもなく消えてしまった。
まるで儂い露のように。

カレンの消えた空に向けて、癒し系は詠う。

「白玉か、何ぞと人の問いしとき、露と答えて、消えなましものを」

—あれは白玉ですか、とあなたが問いかけた時、露です、と答えて、
私も露のように消えてしまいたかった—

夜明けの空に稲光が走る。

—ビリビリビリビリ—

音と共に、空は二つに裂けた。

終